

特集

続—北海道

沖縄と北海道

—南と北から見た日本—新崎 盛暉

司会 新崎先生の略歴についてご紹介申し上げます。

先生は一九三六年に東京で生まれになりました。一九六一年に東京大学文学部社会学科を卒業なさっております。現在、沖縄大学教授でございます。先生のご専門は沖縄現代史並びに社会学でございます。現在、日本政治学会会員、日本社会学会会員、歴史学研究会会員として幅広く研究活動をなさっております。

先生の著書は非常にたくさんございますけれども、特に岩波書店から出されました三部作、一つは、『沖縄問題二十年』（一九六五年）と『沖縄七〇年前後』（一九七〇年）、そしてこの二冊の本をさらに発展いたしました『沖縄戦後史』（一九七六年）。そのほかにも、例えば『沖縄現代史への証言』（沖縄タイムス社、一九八二年）とか、あるいは『日本になった沖縄』（有斐閣、一九八七年）とか、その他非常に多数の著書を刊行しております。

したがって、このような先生の幅広い研究活動の成果を本学の学生諸君にお聞かせいただけることは非常に有益な機会かと思えます。同時に、ただいまから先生が講演なさることは先日北海道新聞にも報道されております。したがって、今回は学外の研究者の方も出席しておられますので、どうかその点を十分に踏まえながら、じっくりと先生の研究成果について拝聴するよう希望いたします。

それでは新崎先生、よろしく願います。

新崎 ただいまご紹介いただきました新崎です。

今日は「沖縄と北海道—南と北から見た日本」ということで、一時間少々お話をさせていただくことになりました。

私は、学生諸君だけを相手に話をすればいいのかと思いましたが、学外の研究者の方もいらしているというので少しびびっているのですが、与えられた時間、私なりに考えていることを話させていただきます。

タイトルは一応「沖縄と北海道—南と北から見た日本」ということになっています。ただ沖縄からやって来て北海道で話をするのだから、沖縄と北海道というタイトルをつけたつもりはありません。このタイトルを選んだ趣旨というのは、言ってみれば南と北という一番外れたところから見直してみると日本の豊かさにより強く気づかされるのではないか。そういうようなことを私は感じておりますので、そのことについてお話をしてみたいと思います。

日本の豊かさに気づかされるというのは何もお金がある豊かさとか、物がたくさんある豊かさ、金満国家的豊かさを言おうとしているわけではありません。日本は自然の上でも、歴史の上でも、文化の上でも非常に豊かな内容を持っている。けれども、それが中央から見ると意外に気づかない。それを辺境と言うべきか、何と言うべきか、とにかく端っこの方から見るとよく見えてくる。そしてそういうところから見

てみると、国家とか、あるいはまた人間の人権とか、そういうものを考える場合にも違った見方ができるのではないだろうか、ということなのです。

私は主として沖縄のことを、特に沖縄の近現代というか、新しい時期の問題を中心に勉強している者ですけれども、そういういわば中央とは違ったところから見ると、いろいろな普段気づかないことに気づくのではないかと思っておりますし、私が実は北海道（北海道というよりも特にアイヌの問題などですけれども）というものに関心を持ち始めるのは、やはり沖縄をずっと掘り下げていくとそういうさまざまなものにぶつかってくるという経過があったので、こういうタイトルで話してみたいということになったわけです。

もう少し具体的な話をしてみますと、例えばこれは別なところで書いたこともあるのですが、沖縄でも桜が咲きます。桜祭りというものがあります。桜が咲いて桜祭りをやるというのは今は全国どこでもやっているものですね。桜祭りというのは一つの観光の目玉になったり、商店街の大売り出しの機会になったりするわけですね。

では、沖縄でいつ桜が咲いて、桜祭りをいつやるのかというと、一月の下旬にやるわけです。沖縄の桜の名所と言われるところが、沖縄（本）島の北部にありますけれども、そこで桜祭りをやるのは一月下旬です。そういうことを私が書きましたら、この大学の経営学部の内田先生が（内田先生は沖縄にもいたことがあるわけですが）それを非常に非常におもしろかった、北海道では桃と桜がどっちが先に咲くのかわからないようなところがあるという話で、桜もこちらでは五月の連休の後に咲くという話をきのう伺いましたけれども、桜が咲く時期も違うわけですね。日本は一般的に温帯にある小さな島国だと言われているわけですが、実は亜寒帯から亜熱帯まで広がる多様な自然を持った社会ではないかと私は思っています。

必ずしも自然、桜がいつ咲くかとかそういう話だけではなくて、歴

史的な問題を考えてみてもそうです。

例えば、私たちが学んできた、あるいは学ばされてきた歴史、日本の歴史というのはどちらかというと、日本民族というのが日本列島というところにもう何千年も前からいて、そこでだんだんいろいろな時代を経て現在に至ってきたのだというような形で語られがちです。しかし、つい五百年前の日本というものを考えてみると、少なくとも今北海道と呼ばれている部分はそのころ日本には入っていなかったわけですし、それから沖縄県と呼ばれている部分と、それから行政的には鹿児島県大島郡と呼ばれているところ、この辺もまた日本という国家の中に編入されていたわけではありませんでした。

北海道は、言うまでもなく先住民族であるアイヌが独自の文化を持つて存在をしていたわけですし、南の方では琉球諸島に、これまた独自の文化を持った社会が存在していた。沖縄の島々というのは大体海を隔てて鹿児島から台湾の間に点々とつながる小さな島々ではありますけれども、それがどれくらいの広がりを持っているかというと、ちょうど青森県から山口県ぐらいまでの広がり大きな海域の中に、点在をしていた。

その島で生きてきた人たちは、この時期に特に中国とか、その他東南アジアなどと貿易をしたり、内部でいろいろな勢力争いをやったりして、十五世紀ぐらいには琉球王国という独自の国家を形成します。つまり、日本という国家の外側で琉球という国家を形成した。このような地域はまず沖縄だけです。この国家は、十五世紀が一番ピークの時代で、東南アジアとかタイとか、現在で言うインドネシアとかいろいろなところと交易をして、そして独自の文化を形成してゆきます。現在、沖縄独特の文化と呼ばれるものは、大体この時期に形成されたものが現在に至っているものだと言っていると思います。歌とか、踊りとか、あるいは着物などの染色とか、それから有名な泡盛というお酒だとか、そういうものは大体この時期に形成された、ある意

味では独自の文化なのですね。

この十五世紀から十六世紀の時期、琉球王国が一番栄えた時期というのは、日本でいうとどういう時期なのだろうかというところ、ほぼ戦国時代ということになるでしょうか。応仁の乱が起るとか、そういう段階の話です。このことはみんなよく知っているわけですね。そして、地方分権的ないろいろな勢力が台頭し始めてきて、江戸というところを見てみれば、そこに太田道灌という人が出てきて江戸城を築いたなどという話が出てくるわけですね。このことについては多くの皆さんが、ある意味では常識としてどこかで耳にしたことのある話だろうと思います。太田道灌が江戸城を築いた。そして狩りに出て急に雨に降られて、そして一軒のあばら屋で雨具を貸してほしいと言った。そうしたら、そこで一人の少女が出てきて、黙って山吹の枝を差し出したというエピソードというのは、大体の人が聞いたことがあるだろうと思います。

聞いたことありますよね。そんなの聞いたことないという人、ちょっと手を挙げてみてください。太田道灌とその山吹の少女のエピソードなどというのは小耳にはさんだこともないという人、いない。ということは大体知っているということですね。だろうと勝手に決めて話をしますけれど、そのとき沖縄には最も琉球王国を繁栄させた尚真王という王様がいた、などということを知っている人は、まずこの中にそれこそ一人もいないのではないかと思います。さらに、ちょっと時代は下がりますが、ほぼ十六世紀に入りかけたところぐらいでしょうか、今度はその琉球王国、最も栄えた時代の琉球王国の一番南の方の石垣島というところで、オヤケアカハチという人物が琉球王府の支配を嫌って戦いを起こした、などという話を知っている人はいない。この石垣島というのはこの大学の宮良高弘先生の出身地ですけども、そういう話を知っている人はだれもいないですよ、多分。いますかね。いないだろうと思います。

では、北海道はそのときどうだったのだろうか。ちょうど、太田道灌が江戸城をつくったのと同じころ、ここでコシヤマインの戦いなどというアイヌの戦いがあつた、ということを知っている人はいないのででしょうか。いますか、コシヤマインなんて聞いたことある人。いないわけね。ここは北海道だと思ふのですけれども。

私たちが学んできた歴史、学ばされてきた歴史というのは、応仁の乱がどうしたとか、室町幕府がどうしたとか、太田道灌が江戸城を築いたとか、そういう歴史なのです。ところが今の日本の広がりで考えてみると、コシヤマインからオヤケアカハチまで、本当は私たちの視野に入れておかなければいけないはずなのです。これを全部視野に入れてみると日本像というのが変わってくるはずなのです。日本の姿というのが変わってくるはずなのです。日本には太田道灌がいただけではなくて、江戸城があつただけではなくて、シャモが少しづつ北海道の地に進出し初めていろいろなことをやり始めてきたことに対する、アイヌの繰り返し繰り返しあつた戦いの中心的なものの中に、コシヤマインという有力者に率いられたアイヌの戦いがあつた。琉球には独自の国家が形成されていたけれども、その国家形成とも外れかけたところで、琉球王府とまだ戦いをしようとした例えばオヤケアカハチなどという者がいたなどということを全部視野に入れてみると、日本の歴史像というのは随分違ってくるはずなのです。

自然の上からも、そしてそういう独自の歴史に培われた文化の上からも、実は日本というのは非常に豊かなものを持っているはずなのです。ところが、この豊さというものを否定したいという考えの方が、今の日本の中ではどちらかというと主流であり、むしろ圧倒的な力を持っていると言っているのかもしれない。

何でも画一化し、均質化してしまう、それが非常にいいのだ。その画一化と均質化が豊かさ——こっちの豊さはお金で表現される豊さです、物で表現される豊さです——そういう豊さを保障するのだと言いたい人

たち。そういう社会的傾向というのが今の日本では非常に強いのだろうと思うのですね。

それを政治家で代表する人はだれかというと、例えば中曽根康弘さんというような人が浮かんできます。あの人がそういう経済効率をどんどん追求した結果、例えば国鉄の分割を押し進めたり、いろいろなことをしました。おかげで北海道のローカル線などはあちらこちらで廃止になったり、国鉄の労働者がくびを切られたりした。一番打撃を受けているのは北海道とか、四国とか、南九州とか、そういうところだろうと思いますけれども。

効率の悪いものは切り捨てて、効率のいいものだけを集中してやっていけば金が儲かるという形での豊さが保障される。そういうときに多様性とか、そういうのはむしろじやまになるのではないかという考え方がどこにある。しかしその考え方はややもすると非常に危険な影響力を持ちかねないわけです。

例えば中曽根康弘さんが総理大臣のときに、一九八六年に国際的に非常に問題を引き起こした発言をやりました。知的水準発言、あるいは単一民族発言というのがありますね。どういうことかというところ、アメリカなんかは多民族国家であっていろいろな民族がごちゃごちゃいる。だから教育効果も上がらない。トータルで見たら黒人だとか、メキシカンだとかいろいろなものがあるものだから知的水準は低いのだという発言をしましたね。それでアメリカの黒人とか、少数民族から非常に多くの反発を食らって、いろいろな弁明をしたあげく、それは日本人が単一民族だということを言っただけだとかいう話をして、今度はアイヌの人たちから批判をされた、ということがありました。

彼がこの発言で言わんとしたことは何であつたのかというと、均質なものの、画一的なものは非常に効率的でいいものなのだ。教育効果もすぐ上がるし、ということなのですね。多様なものはまとまりがなく、ばらばらでだめなのだ。だから、日本の今の豊かさはそういう均

質的、画一的なものが築いてきたのだということを言っているわけなのです。

そして、教育も何も画一的に、例えば亜寒帯の北海道北部から亜熱帯の琉球列島南部まで、同じ教育が行われる。みんな同じことをきちんと覚えて偏差値ランクに従って輪切りにされて、中学に進んで、高校に進んで、大学に進む。こういうことになるのです。

これは笑い話みたいな話なのですが、実は先ほどの桜の話ですけれども、一月下旬に桜祭りをする名護というところの小学校で、低学年の子供に試験をしたのです。桜はいつ咲きますか。桜はいつに咲きますかって、冬に咲くに決まっています。桜は冬に咲いているのです。一月末に桜祭りをみんなやっていているわけです。それで試験の解答にある子供は当然得意になって冬と書きました。これバツになったのです。模範解答は春なのです、桜は春に咲かなければいけないのです。

ありそうもない話なのだけれども本当にあつた話なのです。僕が名護の小学校の父兄に聞いた話です。それで、そういうふうに教えなければいかんという、そういう全国画一のテストの問題があつたり、学習帳があつたりするのでね。

これ一体何なのだろうか。これはもう本当に笑い話と云うべきなのか、涙が出るような話と云うべきなのか。とにかくそうやって日本の社会というのは画一的なもの、均質的なものを追求していきます。その中で人々は全部画一的に均質的になりながら上昇志向、中央志向を重ねていきます。そういうものの中では少数派や辺境やそういうものは余り役に立たない。効率化を妨げるものだしから見られない。そういう社会がつくられてきかなわけなのです。

それでいいのかどうか問われなければならないのではないでしょう。例えば少数派なら少数派という立場にきちんと立ち続けなければならぬと考えている人。あるいは辺境に生まれ、辺境に育つてそ

の社会を發展させていきたいと願っている人。こういう人たちにとって、日本の社会は一体どういう意味を持つのだろうか。

実は、しかしこういうのは中曽根さんだけではないですね。全く同じ、つまり少数民族に対する差別発言というのは自民党の渡辺政調会長などもやったことがありますし、今大きく問題になっているのは法務大臣梶山清六さんの人種差別発言ですね。たしか東南アジアからの出稼ぎの女性の問題、特に売春とか何とかそういうことを新宿あたりでやらざるを得ないような人のことを視察した中で、そういうのをどうやって早目に追い出さなければいかなかという話の中で、アメリカなんかでは黒が白を駆逐している、要するに劣等なものが上等のものを追い払っているというような発言をして、当然のごとくアメリカの黒人とか少数民族とか、それからアフリカ諸国の大使などからも公式な抗議の申し入れを受けざるを得ないことになりました。

今度は海部首相も一緒になって謝罪をやったわけですけども、なかなかアメリカ側は認めてくれないですね。つまりうっかりした法務大臣の発言という話ではなくて、日本というのは中曽根首相のときからずっと、要するに政府要人が同じことを続けている、これは一体何なのだ。要するに日本というのは多民族国家とか、少数者に対する理解が足りないからではないか。そういうことになって、今度は形式的に謝っただけではなかなか済まない。いまだにいろいろ尾を引いていますね。

日本の製品のボイコットをやる人たちがいたり、黒人が市長の市では東京都議会から都市問題の調査団が行ったときにそれを受け入れるのを拒否したりというような、いろいろなことが起こりました。そしてついに十月十八日でしたか、アメリカ下院外交委員会は、日本のそういう姿勢を非難する決議をやりましたね。この決議は梶山法務大臣（法務省というのは実は人権問題を担当する役所なのです）の発言を批判して、日本は多民族国家に対する理解が足りないの、そ

う問題に対して少しきちんとした教育計画を実施しろという注文までつけるような決議をやりました。

そこで日本はどうしたかというと、この決議が行われたのは十月十八日ですけども、十月二十何日かに法務省が各地の法務局（北海道にもあると思いますけれども、法務省の出先機関で、人権侵害事件などがないようにするとか、そういう人権を守る機関でもあるわけですね、日本政府の機構の中では）に対してちゃんと人権問題の学習をしてほしいとビデオを配った。これは朝日新聞で読んだのですけれども、一九五〇年代から六〇年代にかけてのアメリカの公民権運動を、二時間のビデオにまとめた「勝利を見すえて」というタイトルのビデオを配ったというのですね。

これを見て僕は吹き出しちゃったのですけれども、勉強することは非常にいいことです。ただ、日本にとって少数民族の問題とか、そういう問題というのは日本の外側に存在して学習する対象でしかないとなら法務省は考えているらしい。日本内部にちゃんと少数民族問題が存在している、ということを法務省が気づいていないわけですね。

言うまでもなく少数民族問題というのはアイヌの問題です。そして、このアイヌの人たちは既に一九八六年の中曽根発言に対して、おかしいという異議申し立てをしているのですね。そのことが国会でも問題になった。そのことを法務省だったら当然知っていなければいけない。そして自分たちの社会の問題としてそういう問題を取り上げた方が、直接自分たちとは関係ない外の社会のことを学ぶよりも、自分たちが実感としていろいろなことが理解できるはずであり、そういう理解を通じて初めて外の問題、アメリカの問題もよりよく理解できるはずなのです。ところがそれに気づかないから、アメリカから文句言われた。しょうがないからビデオを配って黒人問題を勉強しましょう。それで、受験勉強みたいにビデオ見て、一生懸命何年に黒人の公民権運動が起こってと暗記するつもりかどうか知りませんが、そ

ういわけば勉強の対象として考えようとしているということですね。

アイヌの問題ですけれども、皆さんは北海道旧土人保護法という法律が今なお日本に存在するということを知っていますか。北海道旧土人保護法などというのが存在するということを知っている人、ちょっと手を挙げてみてくれませんか。北海道旧土人保護法という法律の存在することを札幌で知っていられる方は、ちらちらと一割程度ですかね。

言うまでもなくこの北海道旧土人保護法の「旧土人」というのはアイヌということです。この法律は現行法です。今もこの法律は生きていますからね。施行されているのです。

北海道旧土人保護法がそれぐらいでしたら、ますますもって、例えばクナシリ、メナシの戦いなどというのを聞いたことがある人はいないでしょうね。いますか。一人いらつしやる。

なぜ僕が急にクナシリ・メナシなどと言いつ出したかというと、今日の北海道新聞に載っていたのです。今日の北海道新聞を駅で買いましたら、主な記事というところの三番目に「授業で触れぬアイヌ民族」というのがあって、これは第二社会面にその記事が載っていますと書いてあったので見てみました。

どういうことがこの記事には書いてあるかというと、北海道教育委員会の諮問機関であるアイヌ教育研究協議会が、今年の七月に道立の高等学校の全教員を対象にしてアンケート調査を実施したというのです。それで、アイヌ民族のことをどれぐらい知っていて、どれぐらい教えているか、そういうような調査をやったというのです。その中で、実はクナシリ、メナシの戦いについて高校教員の六割以上が知らないと書いてあったので、今皆さんに北海道旧土人保護法のことを聞いたついでに伺ってみました。

クナシリ・メナシの戦いというのはちょうど二百年ぐらい前、二百年前になりますかね。日本固有の領土と言って、いま領土問題で話

題になっている国後島と、メナシというのは、今で言う道東地方と言ったらいのでしょうか。そのアイヌの人たちが和人の悪徳商人の酷使とかそういうものに耐えかねて、蜂起をして七十人ぐらいの和人を殺害したということで、三十何名かのアイヌが処刑になったというそういう事件です。

実は、私は今年の九月にノツカマップのイチャルパへ参加をしたんですね。もちろんクナシリ・メナシの戦いを知らない人は、ノツカマップのイチャルパなるものが何かをご存じないのは当然だと思います。それは、そのクナシリ・メナシの戦いで犠牲になった人たちの慰霊祭なのです。

私は札幌とか、函館には何回か来たことはあるのですが、道東地方というか、そちらの方に行つたのは初めてでした。一度行きたい行きたいと思つていたのですけれどもなかなかその機会がなくて、今年初めてこの九月にこのノツカマップのイチャルパに参加したわけです。

そしてそこで慰霊祭を行った後で、その慰霊祭に参加した何人かの人には真つすぐ根室半島、納沙布岬の突端まで行きました。あそこからは齒舞諸島が見えるとか言つて、望遠鏡で見るところがあるあそこです。あそこに一つの碑が建っているのですけれども、当然皆さんご存じないのだらうと思います。そこにどんな碑が建っているかというのと、これはそのクナシリ・メナシの戦いで殺された和人の側の慰霊碑なのです。それがそこに建っているのです。

これは、実はその当時につくられたものらしいのですけれども、それを国後島に運ぼうとしたときに船が難破したらしくて、波打ち際に発見されたのが昭和四十三年といえますから一九六八年ですか。そこでそこに持つてきて建てたらしいのです。その碑文を見ると、凶悪な蝦夷が謀反を起こしてこういう犠牲者が出たというようなことが書いてあります。ノツカマップのイチャルパを終わつたアイヌの人たち全員ではありませんでしたけれども、その半分ぐらいの人たちはそ

こまで行ってそこでまた慰霊祭をやったんですね。つまり戦いの相手方です。死んだ者に分け隔てはないはずだというのが彼らの考え方のようでした。アイヌの衣裳を着た人たちを含めてそこで慰霊の行事をやっているのを、物珍しげに大勢の自衛隊員が見物をしていましたけれども、そういう体験を私は実は今年の九月にしました。

今年、実は北海道ウタリ協会（これはアイヌの団体ですけども）の野村理事長が沖縄にやって来ました。なぜ沖縄にやって来たかという沖縄に「南北の塔」という塔があります。沖縄で戦争があったということは皆さんご存じだと思います。第二次世界大戦中の太平洋戦争の末期、日本は戦争といえよその国に出かけてよその国で戦争をしていたわけですけども、この戦争末期の原爆投下の直前には沖縄まで攻め込まれて、沖縄は日本で唯一の地上戦の場になったわけですね。大勢の民衆が犠牲になりました。そこには全国各都道府県から兵隊で狩り出されて来た人たちがやっぱり犠牲になりました。

その人たちの中には北海道の部隊もあり、そしてその中にはアイヌ出身の兵士もいました。アイヌ出身の兵士と戦場になった部落の沖縄の人たちとの助け合いとか、アイヌの人たちというのはそういう中で自分たちは兵士ですけども、沖縄の民衆に対していろいろ配慮をしたり、大体兵隊は民衆から食糧を奪ってでも自分たちが生き延びようとした時代に、そうではない対応をしたということもあったようです。これはまだいろいろな歴史的な事実に関して幾つかの説もあるのですが、そういうこともあったようで、そこにそういうことを記念して「南北の塔」という慰霊塔が建てられています。

そこで五年に一遍ぐらいアイヌの人たちがこちらから行ってイチャルパ、慰霊祭をやるのです。それで三回目のイチャルパに野村理事長たちがやって来ました。私にはこういうことで沖縄にいけますという連絡がありましたので、その慰霊祭に参加しました。

そのとき、この前ノッカマップのイチャルパに行ってきたね、

という話をしました。そのときには野村理事長は参加していませんでしたけれども、これは随分前から毎年行われている行事ですので、理事長も参加したことがあるのです。これは理事長がおっしゃったことですけども、ノッカマップのイチャルパが終わって納沙布岬まで行って慰霊祭をやるので、私（野村さん）は涙が出たというのです。納沙布岬の慰霊碑では、根室市民が慰霊祭をやっているようなのです。この人たちはアイヌの方の慰霊祭は別にやらないし、それに参加することもないのだそうです。

野村理事長は、アイヌはばかだから自分たちをやった相手までそうやってやっているのだ。こんな話をして、そしてやっぱりそれを見たら自分は涙が出たという話をしておられましたけれども、これはつまり征服した者とされた者のどちらが、寛容な心を持っているかというようなことの一つの例証なのかもしれない。もちろん単純にいつてしまうと問題かもしれません。私にもよくわからないところはたくさんあります。

ただ、私はそのときに南北の塔の前で、たまたま私がノッカマップのイチャルパに参加したという雑談の中での話だったのですが、つまりそういうことが行われたりもしているという、そういうことを北海道に住んでいらつしやる皆さんに知っていただきたいのです。皆さんはもしかしたら納沙布岬にも行かれたことがあるかもしれないし、これから行かれることもあるかもしれない。そして、いわゆる北方領土を望遠鏡で眺めることがあるかもしれない皆さんが、そこに一つの慰霊碑があるということ、そこにどういう文字が刻まれているかということ、その背後にどういう歴史的背景があつて、そこで毎年何が行われているかということを知ってほしい。何かの機会に皆さんはすぐそれを直接体験することができるかもしれませんので、クナシリ・メナシという言葉が出たついでに、ちょっと脱線してそういう話をしてみたわけです。

話をもう一度北海道旧土人保護法という法律に戻したいと思います。

この北海道旧土人保護法という法律はどういう法律で、どういうときに、どうやってできたのか。そして今どういう役割を持っており、アイヌの人たちはそれに対してどういう要求をしているのか、ということをおよそとだけ話をしておきたいと思っています。

アイヌは北海道の先住民族だったわけですが、だんだんと和人の進出の中で迫害をされて、追いつめられていくわけですね。その詳しい歴史についての本は北海道では幾らでも手に入ります。古本屋さんの本棚にも並んでいますし、恐らくこの大学の図書館でも探す気になれば幾らでも本を見つけることができると思います。

関心のある方はぜひ後で見たいのですが、そんなことは知っているよとおっしゃる方は恐らくいないと思います。北海道旧土人保護法を知っている方が五、六人しかいないのですから。もし私の話で何か関心を持ったらぜひそうやって調べてほしいと思います。北海道がいわゆる松前藩だとか、徳川幕府の直轄地になったり、いろいろしながら日本化されていった中で、明治維新が起こり、ここが蝦夷地、蝦夷ヶ島から北海道というふうにな名前が変わり、そしてロシアの南下をにらみながら、開発すべき北の辺境となった。

沖縄は中国、清と対決する南の要衝だったのですけれども、北海道はロシアと対抗する北の要衝として開拓農民を送り込んだり、屯田兵を送り込んだりして開拓した。その歴史は多くの皆さんがアイヌのことなんかを抜きにすれば、多分かなりの程度にご存じだろうと思います。

少なくとも北海道出身の方、この大学はどちらかというと地元比重が大きいようですし、その人たちのおじいさんか、ひいおじいさんぐらいでそうやって北海道に来た人はたくさんいるはずですから、そこからは私がこんなところでしゃべる必要はまずない話のように思います。ともかく問題はアイヌの立場ですね。

アイヌの人たちはこの北海道の広大な川とか、海とか、原野で狩りをしたり、鹿や熊をつかまえたり、鮭をとったりして生活をしていたわけです。ところが、当然それはだれの所有とか、あるいは共有財産とか、そういうぐあいに例えば登記された財産とかそういうものでありませんでした。

そこで、北海道を開拓し始めた明治政府は、ここを要するに所有者のいない土地ということでみんなある意味では国有財産にして、それを開拓を一生懸命やる人、あるいは金を持っている人にどんどん払い下げて開拓をさせていくわけですね。そうすると、そうやって私有地になってしまふと、アイヌの生活圏がどんどん失われていくことになります。生活できなくなっていくわけですね。そして、どんどんと辺境に追いやりられたり、圧迫されたりして、新たに持ち込まれた病気等に感染したりして亡くなる人が出て来るとか、ある意味では絶滅に瀕する状態になりました。こういう哀れな旧土人を何とかして救済してやろうではないかというのが、明治三十二年でしたか、一八九九年にできたこの北海道旧土人保護法という法律なのです。

その旧土人保護法の中身はどういうものかというと、まず第一に旧土人で農業をやりたいという者については一万五千坪（五町歩）を上限として、土地を与えることができる。与えてもそれを、和人などにとられたりするといけないから、いろいろな条件、制約がついていて、相続する以外で人に譲り渡すことはできないとか、いろいろな細かい限定つきでそういうことが行われました。

ただ、土地を払い下げるといっても、いい土地はもうみんな払い下げられた後なのです。だから後のいろいろな調査の中なんかにも出てきますけれども、農耕に適さない土地が与えられるとか、そういうこともあったし、何年間でちゃんと農地にしなければまた取り上げ没収するとか、そういう規定があったりもして、現在ではそうやって与えられた土地のたしか十数パーセントしか残っていないという記録

があるようです。ともかく、そういう土地を与えるということで、与えるからにはいろいろな条件つきだということになりました。

それからもう一つは、病気になるっても医者にもかかれなような者には薬代をやるとか、今の医療扶助みたいなものですかね。アイヌ出身で学校に行きたいけれども授業料がない者は授業料を支給してやるとか、そんなこととか、アイヌのコタンなどには国の経費で学校をつくってやるとか、そんなことが幾つか定められていました。

ところが戦後、社会福祉とか、社会保障とか、教育関係の法律がどんどんできてきたので、もうアイヌに対してだけ特別なこういう法律をつくっておくことは無いというので、そういう医療扶助の面とか、教育とかそういうものはみんな削除されました。

あとは土地を与えるということ、土地を処分するのにはいろいろな制約があるということ、これだけが残ったような形になったわけですよ。じゃあ、今でもアイヌの人たちが農業をやりたいから土地をくださいと言ったらくれるか。くれればそれを使って土地をもらうこともできるのですね。戦後ある人が、北海道旧土人保護法という法律があるので農業をやりたいから土地をくれというふうに申し出たことがあるのだそうです。そうしたら、北海道庁はびっくり仰天して、さてどうしたものだろうかと国と相談した結果、昭和二十三年にできた国有財産法という法律があつて、北海道知事には土地を与える権限がなくなつたからだめだと言つて、けとばしちやつたというのですね。そしてもう土地をくれないことになったのです。つまり後からできた法律が前にできた法律を制約するというわけですよ。

アイヌの土地が没収されたもう一つの大きな原因には、戦後の農地改革があります。農地改革というのは働かない地主から土地を安く取り上げて、そして働いている人間に譲り渡すという、そういう政策。そのための特別措置法がつくられたわけですね。その中にはアイヌの土地なんかも入っていたのですね。アイヌだけじゃなくて、そのとき

には北海道庁も、これはアイヌの土地には適用するなという陳情をしたようだけれども、後からできた法律が有効だということで、土地を取り上げられた人もたくさんいたようですね。

ともかく今は、そういう後からできた法律のおかげでもう土地は与えないというのですね。与えなくなつて今度は何が残っているかという、昔与えられた土地を処分することができないという制約だけが残っているのです。もともとこの法律は滅亡しかかった者をお恵みで助けてやるという法律です。アイヌの人たちが、世界的にあらこちらの先住民と交流をする中で、例えばアメリカにはインディアンがいますし、オーストラリアにはアボリジニがいますし、ニュージーランドにはマオリとかいろいろ先住民がいますね。そういう人たちもいろいろな権利主張を始めてきています。そういう人たちの交流の中で、どうもこれはおかしいじゃないか。こんな差別的な法律は廃止して、アイヌが北海道の先住民であることをまず尊重するという、権利尊重をうたった新しい法律をつくれという要求を出してきました。

これがアイヌ新法。仮の名前ですけどもアイヌ新法という新しい法律。北海道旧土人保護法という名称からして差別的なこの法律を廃止して、アイヌの新しい権利を認めた法律をつくれと要求をしてきたのが、たしか一九八四年だったわけです。それでこれを道議会にも、道知事にも陳情をしました。そこで横路知事がウタリ問題懇話会という諮問機関をつくつて協議をした結果、一九八八年に一つの結論を得て、先住権というものの中身はまだはつきりしない面がたくさんあるけれども、やっぱり先住権というのは非常に重要な権利である。それに基づいてアイヌ新法というのをつくるべきだということを国に申し入れをしました。

実は、この知事の申し入れとウタリ協会などの要求との間に一つ大きな違いがあつて、僕はこの違いの問題に非常に大きな関心があるのですが、ここでは時間が無いので余りそこには触れません。

それはどうということかという、ウタリ協会の最初の要求の中には民族議席をよこせという要求があったのです。つまり、アイヌの人たちが自分たちの権利を主張する議席を国会にも、道議会にも欲しい。しかしアイヌの有権者というのは非常に少ないわけですから、北海道民生部が一九八六年に行なった北海道ウタリ生活実態調査によると、みずからアイヌと言っている人たちは約二万五千人、七千世帯というふう言われています。そういうこともあって、特別な議席を欲しいという要求をしたのですけれども、これは知事の諮問機関の段階で、これは憲法に違反するからできないということで排除されたのです。本当に憲法に違反するかどうかというのは恐らく一つの論点になると思います。

去年六月ごろに北海道新聞社でアイヌ新法の問題についてのシンポジウムがあつて、実は私もパネリストの一人として出たことがあつて、私の主張とかそういうのは当時の北海道新聞に載っていますので、関心のある人はそれを新聞のとじ込みか何かで見ていただきたいと思いますけれども、そういう民族議席の問題が外れていました。

ここではその問題の意味するところは言いませんけれども、ともかく国に道知事が要望書を出してからどうなったか。それから一年ぐらいたった去年の夏ごろの北海道新聞に、政府は各省庁のどこがこの問題を担当すべきかという担当の窓口が決まらないので、あつちでけばしこつちでけとばしして棚ざらしになっている、この調子だと三十年たつてもアイヌ新法はできないのではないか、という記事が出ました。つまり人権問題だから法務省だ。あるいは、これは福祉の問題だから厚生省だ、いやいや教育の問題だから文部省だ。外務省だという話も出てくるのです。

なぜ外務省かというと、実は国際的に少数民族の問題を論議する条約とか、機関とかがあつて外務省がそこに絡んでくるのです。とにかくそうやってけとばし合いをやつてなかなか決まらないという記事が

載っていましたけれども、去年の暮れによりやく内閣の内政審議室とかいうところが窓口になって、各省庁から一人ずつ代表を出して勉強会を始めるということになりました。ただそのときに内閣内政審議室が断っているのは、これがどういふものかを勉強するだけであつて、この法律をつくるという前提のもとに検討しているではありませんよ、ということ。

なぜそうなのかというと、日本政府は先ほどの中曽根首相の発言にもありますけれども、基本的には日本は単一民族だと考えていました。国連にもそういう報告書を出したことがあります。

つまり国連で一九六六年に一つの規約が採択されているのです。国連人権規約というのがある、そのB規約というので、市民的及び政治的権利に関する国際規約というのがあります。その中には少数民族の権利が守られなければならないという条項があつて、それがきちんと守られ、その権利がどれぐらい改善されたかについて、国連に報告書を出さなければいけないことになっているのです。

日本政府はこの規約を一九七九年に国会で承認しました。したがつて、一九八〇年にその規約に基づいて報告書を出しました。しかしその報告書には、本規約に規定する意味での少数民族は我が国には存在しない、と言つて報告したのです。

これが実は問題になるのは例の中曽根発言のときです。中曽根発言が一九八六年にあつて、外国からいろいろ言われて、そしてまたアイヌからいろいろなクレームがついたので国会でいろいろ議論をしている。その中でこの報告が問題になった。こういう意味での少数民族は存在しないと言っている。これはなぜか、というふうなことになる、二回目の報告書からは独自の文化を持つアイヌが存在するということは認めたのです。報告書を少し変えて。ただ、アイヌは憲法のもとに平等な立場にあるので、決して日本の中で差別を受けているとかそういうことはないというぐあいに報告書を出しました。

ここで法のもとの平等というのは非常にいろいろな意味を持ちます。アイヌも投票権がありますよ。そういう意味では確かに平等なのですね。しかし法のもとの扱いが平等だから一切の社会的差別が存在しないのであれば、日本には部落差別も存在しないのですね。被差別部落などというのはないはずですよ。法的に別に差別する法律はありません。選挙権もあるし、何でもあるじゃないか。じゃあ、そこに差別はないのかというと、あるというのが一般的な認識であり、したがってそれをなくさなければいけないということで、例えば同和対策事業などというのがあり、それを推進するための特別措置法。これは名前が変わりましたが、法律もあるのですね。じゃあ、なぜアイヌ新法がないのか。これは私はアイヌ及びアイヌ新法を支持する社会的関心とか、社会的力が部落問題などについてよりはるかに弱いからだ。それに過ぎないというふうに思っています。

例えば被差別部落だったら三百万のいわば仲間がいるとか、部落解放同盟という組織があるとか。そしてそういう問題についてのとりあえずは社会的な認識がかなり広まってきたとか、そういうことがあるけれども、北海道では北海道旧土人保護法という法律が今なお存在しているということすら、沖縄と北海道という講演を聞きに来た人たちの十分の一も知らないという現実があるのですね。これではなかなかこの問題が重要だよということを認識させる力には、なり得ないだろうと思います。

実は、最近国際化、国際化とよく言われますよね。国際化とは一体何なのだろうか。国際社会では、むしろ日本内部よりもアイヌの問題などは認識されやすいのですね。国連、あるいは国連の付属機関の中でそういう先住民族とか、少数民族の地位を守ったり考えなければいけないということを検討したり、規約をつくったりする機関が、例えばILOだとかいろいろあります。そういうところではアイヌの問題というのはすぐ浸透するのですね。日本では浸透しないわけです。そう

いうところに問題を持ち出されることを日本政府は非常に嫌います。何か国の体面に傷がつくと思うのかどうかしらないけれども、例えばアイヌの人たちがそういうところに出かけて行って、日本の中にこういう問題があると言うのを非常に嫌うのですね。ところが先住民族、少数民族の問題というのは世界的にあちらこちらにあつて、普遍的性格を持っているわけですから、国際社会の中での方が理解がされやすい面があります。

アイヌの人たちにとってみれば、自分たちの権利主張もそういう人たちの交流の中から生まれてきたし、日本政府はまた外からの圧力に弱いのですね。アイヌが中から要求しても聞かないのに、国連が何とか言ったら聞いてくれるとか、そういうところがありますね。アメリカの言うことだったら何でも聞きますというところがあるわけで、しかし要するに国際的な問題にされると困るというのがあります。

一体国際化とは何なのだろうか。国際的に共通な問題として、今例えば先住民族、少数民族の問題がある。そういうものを国境を越えていろいろみんなで議論しよう、改善しよう。こういう人たちの権利を尊重しよう。高めていこうというのは、国際化時代にふさわしいテーマだと私は思うのですが、なかなか日本ではそういうことにならないのですね。

国際化というのは、一年間に海外旅行する人の数が一千万人を超したとか、そういうのが国際化の基準になっているのですね。そしてその人たちが外に行って、ああやっぱり日本でよかった。ほかの社会へ行くとこんなに治安が悪いとか、こんなに貧しい人たちがいるとか、どうも衛生状態が悪いとか、それに比べると日本はなるほどいい国だといって自覚して帰って来るのが、何か国際化のように日本政府は勘違いをしている。あるいは社会的なそういう認識があるのかもしれないと思います。

もう一つ、ここで話をしたついでと言っては何ですけども、北方

領土問題というのがありますね。これは少なくとも北海道の人はだれも知らない人はいないだろうと思います。私が北海道に来るようになってから、ずっと北海道庁の入り口には「国民の総意で戻そう北方領土」というスローガンがかけています。いつからかけられているかわかりませんが、多分一九八一年ぐらいからだと思います。なぜ一九八一年かという、その年から日本政府は北方領土の日などというものをつくって、大々的なキャンペーン活動を始めているからです。

固有の領土というのは一体何なのだろうか。ここでも余り詳しい議論はしませんけれども、一つだけ紹介しておきたいのは、その北方領土の日が設定された翌年の一九八二年に、やはり北海道ウタリ協会が、総会で千島や樺太、いわゆる北方領土の先住民族である我々の先住権を無視して、勝手に返還運動なんかを進めているのは遺憾である。先住民族としての権利を我々は留保するという総会決定をやっています。北方領土返還運動をやっている人の九九・九パーセントはそういうことを知らないと思います。ウタリ協会がそこで言いたいことは何なのだろうか。まだウタリ協会も公式には先住権の留保というのはこういう意味ですよということを言っていない。しかしアイヌの中ではそういう主張をしている人がいます。

これは今年の六、七月ごろでしたけれども、朝日新聞の「論壇」に阿寒湖畔のアイヌコタンに住む豊岡正則さんという人が短い文章を寄せています。そこで彼が言っているのは、本来であれば北方領土というのとはもとアイヌが住んでいたのだからアイヌの国として独立させるのが本当だけれども、急にそうはいかないかもしれない。少なくともここは先住民族であるアイヌや日本の国策に翻弄されてた日本系の旧島民や、今ここに住んでいるソ連系の新島民、この三者の民族共生の哲学によって問題解決をしたい。そういうことを書いていました。今、日本は北方領土を返還しろと言っています。二島返還、四島返

還とかいろいろ言っています。そうすると、もう戦後四十五年たって、例えば色丹島だけでも六千人からのロシア系の住民が住んでいると言われます。おじいさんの代から住んでいる人もいると言っているのです。北方領土が日本になったたちこの人たちはどうするのか、日本政府はどうしようと考えているのか。

僕が知っている範囲で、新聞記者たちから聞いたたりして知り得た範囲で言うと、この人たちは当然お帰りいただく。つまり追い出すと考えているのです。かつて日本系旧島民が、あそこを追われたように、今度はロシア系新島民を領土返還によって追い出す。日本は金をたくさん持っているから、少しはお金を払って追い出すという話になるのかどうか知りませんが、とにかく生活の場を奪うということが当然領土返還として考えられているというのです。

これでいいのだろうか。豊岡さんの言っていることは少なくともそうではないのです。民族共生と言っているのです。例えばロシアの人たちを追いついて後どうなるかという、もう今から不動産屋があそこ土地はどうだといっているいろいろな調査を開始しているというのが、朝日新聞の記事なんかになっているのです。北海道でもいわゆるリゾートとか何とか土地買い占め、こちらでは内地資本と言うようですけれども、土地買い占めが起きているみたいです。沖縄では大和資本と言いますが、そういうのが起こっています。

新しい処女地、まさにやだれが出るような、彼らにとって、あぶく銭を山ほど持っていてあそこで何かをやるかと思っている人たちにとっては、あそこを買い占めて温泉つきスキー場をつくって、そこらにアイヌとか、居残ったロシア人とか、そういう原住民が点在していて、それを眺めながらお酒を一杯飲んで、こういうレジャーランドをつくるうではないか。こういうことになりかねない。いや、この可能性が非常に大きいのではない。私はそう思うのです。

つまり領土などということを考えるときに、例えば沖縄も戦後ずっ

とアメリカの領土であつて―アメリカの領土と言つちやうと問題がありますけれども―アメリカに支配されていて、それが日本に返されてきたわけですけども、領土というのは国家のメンツを保つための地面であるのか。あるいはそこ昔から深くかわつて生きてきた人たちの生活の場であるのか。どっちを中心として考えた方がいいのか。

私はもちろん人間だと思ひますね。だから北方領土返還などと言うときに、まず考えなければいけないのは、一体だれのための、何のための返還なのかということだろうと思ひます。

そこで深くかわつてきた先住民の人たち、例えばさっきのクナシリ・メナシのクナシリというのはまさに国後島の国後です。この前ノツカマップのイチャルパのときに、来年は国後でやりたいなというふうにその実行委員会の委員長の長老の人が言っていました。しかしそのときに、彼らは北方領土を返還させてそこでやろうという話ではないのですね。ただ自由に行きたい、自由往来をしたい。自由にみんなでそこに行つてそういうこともできるような状態をつくりたい。だから私は結論から言うところのことだと思ひつています。

少なくとも、いわゆる北方領土問題の解決は、まず少なくとも過渡的共同管理が必要ではないか。一定の期間は少なくともソ連と日本が共同で運営したり、管理をする。何のためか。先住民民族とか、旧島民とか、新島民とかの共存の場をつくる努力をするためである。そして最終的に、それらの人たちが国家主権を選択すればいい。やつぱり自分たちの将来を考えたらロシアと一緒にの方がいい、ソ連と一緒にの方がいいと思へばソ連に行けばいいし、日本と一緒にになりたいと思へば日本に来ればいい。そうしたら両方競争していろいろサービスするかもしれない。あるいは、やつぱりそういう大国に吸収されるよりは、小なりともいへども我々はここで独立してみようじゃないかと思つたら、独立すればいいのじゃないでしょうか。

つまり、共同管理とか、みんなと一緒に仕事をできるとか、そうい

うのが国際化のモデルケースじゃないのか、と私は思ふのです。

ところで最近、やたらにコンスタンチン君の話ばかり大きく取り上げられています。それも結構ではありますけれども、なぜそういうことだけがジャーナリズムの関心対象になるのだろうか。もちろんやけどをした子供を助けよう、これはヒューマニズムに燃えた非常にいい行為です。特に、これがソ連と日本というよりは、サハリンと北海道というような形で実現したというのはなかなかいいことだとは思ひますね。しかし、それをもっといろいろな形で多様に、柔軟に考えることはできないだろうか。それを考えることができるのが、実は北海道という地の利ではないか、と私は思ふのです。

だんだん時間がなくなつてきて、何か沖繩の話が余りなくて北海道の話ばかりした感じになりますけれども、沖繩の話を最後にちよつとだけつけ加えておきたいと思ひます。

国際交流との関連ですけれども、先ほど沖繩で戦争があつた話をしました。それでアイヌの人たちが犠牲になつた話もしました。もちろん一番犠牲になつたのは沖繩の人間です。そこで生活していた人間です。

戦争の犠牲になつた人たちがどれくらいいるかということで、いろいろな記録があります。例えば住民が何人、日本兵が何人、アメリカ兵が何人、その統計数字の中に全く載つてこない人たちがいます。何人死んだかもわからない人たち。その人たちはどういう人たちか。朝鮮半島から連れてこられた軍夫という人たちです。あるいは慰安婦という人たちです。この人たちがどれくらい沖繩に連れて来られて、戦争に協力させられて、そして死んでいったのか、正式な記録はありません。かろうじて、生き残つて引き上げていった人が三千人ぐらいという記録をやつとたどることができました。この人たちの記録はどこにもないのですね。沖繩戦の本のどこを見ても、そういう人たちがいたというのは出てきませんけれども、どれくらい犠牲になつたという話

はない。

例えば戦争犠牲者というのがリストになったりして出てきます。そして、日本軍何人、それからアメリカ軍何人、住民の数字も少しいかげんで、正確ではありませんが九万四千人とか。そんなに端数がないはずなのですけれども、これは非常に杜撰な計算をやっているからそうなるのです。実は戦争が始まる前にそこで何人住んでいたか、疎開した人たちがどれくらいいたか、戦争が終わってみたら生き残ってきた人たちがどれくらいいたか。それを足したり引いたりしたら、とにかく九万四千人消えていたから、この九万四千人が戦争の犠牲者だろうと。

常に民衆というのはそういう立場に置かれるのですね。兵隊は正確にわかるのですね、どこから兵隊に連れて行かれた。アメリカ軍もわかっている。しかしごく大まかな数字しか残っていないのが、朝鮮人なのです。これを一体私たちはどう考えるべきか。例えばソ連がシベリアに日本軍の将兵を抑留した。強制労働をさせた。その記録を明らかにしないのはけしからんなどといって、最近やっと明らかにしてきた。北海道新聞にたくさん名簿も残って居ましたね。そういうことをソ連に要求している人たちが、日本が朝鮮に何をやったかというのを同時に考えているかどうか。

つまり、自分がやられたことはよく覚えていいるのです。足を踏まれた痛みはわかるけれども、自分が踏んでいるときに相手がどれくらい痛みを感じているかは全然わからない。

この前ノ・テウ大統領が来たときに強制連行の記録を明らかにしろと要求したら、日本政府は調べてみるとか言って、結局よくわからないとかいう話になっていきますね。それでも、日本の中で少しずつ必死になってそれを調べている人たちもないわけではありません。沖縄での軍夫とか、慰安婦とかいう人たちですけれども、何人連行されてきたかはわからないが、三千人ぐらいの人たちは祖国へ帰って行き

ました。

実は数年前、数年前というのはちょうど中曽根首相が単一民族発言をしたことです。沖縄戦を生き残った人たちのグループ、いつか沖縄に行つて沖縄で死んだ人たちの魂を招く招魂祭をやつて自分たちのふるさとに慰霊碑を建てたい、そういう願いを持っていた人たちのグループがありました。

最近少し違つてきたかもしれませんが、韓国は当時は全斗煥、チョン・ド・ファン政権の時代、軍事政権の時代ですけれども、韓国には当時から日本の修学旅行生が大量に行つて、向こうの警察の白バイに道案内されながら修学旅行をしているのに、向こうから外に出るなどということは非常に難しかったですね、数年前は。彼らはずっとそういう願いを持ちながら、あるときには朝鮮戦争があり、あるときには政変があり、ずっと来れなかったのです。ところが、ちゃんとした機関、権威ある機関が招待すれば沖縄に来れるという話になったのです。

何とか協力してくれないだろうかと頼まりました。そこで私が、当時私は沖縄大学の学長をやっていたわけですが、学長名でこれらの代表の人たちに招待状をだしました。沖縄大学が、招魂祭をやるわけにはいかないですね。何で招待したかという、沖縄大学で強制連行された韓国人軍夫と沖縄戦というシンポジウムをやりたい。その講師として向こうから来たいという人たちの名前を挙げて、講師としてこの人たちを招待したい、という招待状を出しました。

そうすることによって、彼らは韓国を出てくることができました。彼らは別にシンポジウムの講師をやりたいわけではありません。彼らがやりたいのは招魂祭でした。ただ、そういうことを大学がやるわけにはいきませんから、講師として招待しました。そしてみんなに呼びかけて、これは大学だけではなくて実行委員会をつくつて社会に呼びかけて、そして彼らの滞在費を賄うとか、そういうことをやろうとい

う運動をやりました。そのときに一番初めにカンパを一万円送って来た人がいました。現金封筒で沖縄大学に。出している場所を見たら那覇拘置所でした。なぜ那覇拘置所から来たかというところ、そこに収容されていた在日朝鮮人二世、彼は暴力団か何かでピストルの密輸か何かでつかまっているのですね。そういう人です。そういう人が沖縄で、戦後生まれの自分たちが知らなかったこういうことがあるということに感激して、そして一万円を送ってきたのですね。

そのほかにもいろいろなことがありましたが、私は国際交流というのはこういうことではないかと思うのですね。つまり、在日朝鮮人の問題はこうしたこうした、いろいろな問題があります。それでそういう人たちが来て、シンポジウムもやりましたし、新聞とか、テレビは密着取材をやって、それで沖縄でも初めて自分たちだけが被害者ではなかったという認識が、一般的に非常に大きく広がっていききました。そして、その翌年、慶尚北道というところに慰霊碑が建てられることになって、今度は我々が招待されることになったのです。

実は私は十年ぐらい前に北朝鮮に行ったことがありまして、今は少し事情は違ってきていますけれども、北に行った人間は絶対南に入れないはずなのです。ところが向こうからそういう招待状が来たら、韓国領事館も困ってしまうのです。ビザを出さないわけにはいかないわけだ。

国際交流というのはどういうことなのか。つまり朝鮮の人たちを強制連行したのは日本という国家がやったことです。国家が責任をとるべきなのです。招魂祭も国家がやるべきなのです。我々がカンパを

したり招待状を出したりしてやるべき話ではないのかもしれませんが、しかし一度私たちが民衆サイドでいろいろな関係をつくり直していくとするならば、そういうことを積み重ねていくことが必要なのではないか。

私の言う国際交流というのは、そういう目に見えないところ、ここではロシア人とのいろいろな交流があるはずだし、沖縄で言うところと台湾人とか、あるいは今言ったような朝鮮人とかのいろいろな交流があるかもしれない。こういうことを一つ一つ積み上げていいたら新しいものが見えてくるだろうし、その見えやすい歴史を持っているのはまさに北海道や沖縄ではないのだろうか。そういうところから自分たちの地域に根差した活動が広まっていって、この日本という国ももう少しよくなるのではないだろうか。私が今日話したかったことはそういうことです。

ぜひ北海道の皆さんは、少なくともアイヌの問題に今までよりも少しでも関心を持っていたきたいというお願いをして、終わりにしたいと思います。

司会 どうも新崎先生、本当にありがとうございました。

学生諸君、何か質問がございましたら、ほんのちよつとしか時間がありませんけれども、質問ございませんか。

それでは、講演会を終了させていただきます。もう一度、絶大な拍手をお願いいたします。

(なお、この講演会は一九九〇年十二月六日、札幌大学経営学部主催で開催されたものです。)